

One hot summer day, there was a single duck warming her eggs inside the bushes, by the farm pond.

Shortly after, the eggs started to crack one right after another, and from inside adorable ducklings with yellow feathers showed their faces.

"Oh, what cute babies!"

The mother duck gently cleaned the new born ducklings' feathers with her beak.

However, after taking a closer look, she realized there was a single duckling that looked different from the rest.

That duckling was bigger compared to the other ones and his feather color was a dirty gray instead of yellow.



5

Over time, as the duckling grew bigger, he started to get bullied by his siblings.

"You're so ugly. Are you really our brother?"

"We are not going to play with a strange duck like you."

In tears, the ugly duckling looked at his reflection on the water surface.

"Why only I look ugly. Everyone must want me gone."

The duckling decided to leave everyone.



ある、なつの あつい ひ。

のうじょうの いけの ほとりにある、しげみの なかで、
いちわの アヒルが、たまごを あたためて いました。

まもなく、たまごが ひつつ、またひとつと われはじめ、
なかから きいろい はねの、かわいらしい
ひなどりたちが かおを のぞかせました。

「まあ、かわいい こどもたち」

おかあさんアヒルは めを ほそめて、
ひなどりたちの はねを くちばしで つくろいました。

しかし よくみると、ひなどりたちの なかに
いちわだけ、ほかの ひなどりたちとは
どうも すがたの ちがう こが いました。
ほかの ひなどりたち よりも、
ひとまわり からだが おおきく、
はねの いろも きいろでは なく、
うすよごれた はいいろを していました。



ときが たつに つれて、だんだんと、
その ひなどりは、ほかの きょうだいたちから
いじめられるように なっていきました。

「おまえは、みにくいね。

ほんとうに ぼくたちの きょうだい なのかい？」

「おまえみたいに へんなアヒルとは、

あそんで あげないよ」

みにくい アヒルのこは、なみだを ながしながら、
すいめん に うつった じぶんの すがたを みつめました。

「ああ、どうして ぼくだけ、こんなに みにくいすがたを

しているんだろう。みんな、

ぼくなんて いなくなればいいと おもっているんだ」

みにくい アヒルのこは、みんなの まえから

すがたを けすことに しました。

